

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00006

研究課題名（和文）人新世の空間哲学：リズム・気配・人間ならざるものとの共存の空間をめぐって

研究課題名（英文）Philosophy in the Anthropocene: On Rythme, Ambience and the space of coexistence with non-human beings

研究代表者

篠原 雅武（Shinohara, Masatake）

京都大学・総合生存学館・特定准教授

研究者番号：10636335

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究「人新世の空間哲学：リズム・気配・人間ならざるものとの共存の空間をめぐって」は、人新世的な状況に生きているという想定のもと、「人間の条件」をめぐらる問題に関して、哲学的な観点からそれが何かを明らかにするという課題に取り組み、いくつかの成果をえた。人間存在の条件に関して、人間世界と人間ならざるもの世界の二つの世界の相互浸透性を強調する立場から議論を進めたのであるが、次第に、人間世界の限界において垣間見られることになる、前言語的な領域としての雰囲気、リズムの存在をいかにして言語的に表現するか、そのために要請される、哲学的文章のスタイルへの問いをめぐらる議論へと展開することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては、人新世に関する哲学的な考察をめぐらる、英語圏での研究状況との接点で、その状況の理論的整理と解釈、および翻訳を通じた紹介を行うことを試みるなか、人新世という自然科学の側で提起された状況認識を踏まえつつ、それを人間生活の条件に関わる問題として哲学的に定式化し直し、哲学的思考の拡張の可能性をめぐらる議論の状況を整理することに貢献した。また、人新世的状況における人間の条件を哲学的な言語で表現するという課題への取り組みに際しては、芸術実践との接点で、そこでの対話的關係が求められるということ、そこでアーティストとの対話と、その作品から示唆を得ていくことの大切さを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：The research project Philosophy in the Anthropocene: On Rythme, Ambience and the Space of coexistence with non-human beings has tackled with several topics concerning the problem of the human condition in the age of the Anthropocene in terms of the philosophical point of view. With regard to the philosophical problem of the human condition, It has proceeded from the standpoint that emphasizes the relationship of interpenetration between the human world and non-human world. Yet, during the process of the project, I can develop it into a discussion that concerns the question of the way of expressing the topics such as the ambience as the pre-linguistic dimension and the reality of rhythm that would be glimpsed at the edge of the human world.

研究分野：哲学

キーワード：人間の条件 人新世 人間ならざるもの 前言語的次元 写真論

1. 研究開始当初の背景

集中豪雨、台風、高温といった異常事態が頻発しつつある現代において、気候変動ないしは温暖化は、人間の生存条件にたいする脅威とみなされつつある。パウル・クルツェンたちは、人間の生存条件が地球的・自然的なものに影響されてしまう状況になっていると主張し、この状況を人新世と名付けた。また、地球システム科学では、「プラネタリー・バウンダリー」という概念が提唱されている。人新世をめぐる自然科学の動向との関連で、人間の存在条件についての問いを重要課題としてきた哲学の分野でも、英語圏を中心に、新たな展開が始まっている。すなわち、20世紀以後の哲学の議論で展開してきた「超越論的な場」や「人間の条件」の概念が、人新世という、地球的・自然的なものとの相互浸透の状況との関連で問い直されるようになった。これらの議論では、人新世の時代認識のもとでは、人間世界を、外的な地球的・自然的との相互連関・浸透的な過程において形成されるものと捉えたうえで、人間の条件をあらためて考えることの重要性が示唆されている。

だが、以上の議論では、人間が存在するところとしての世界に関する、その場所性、空間性の観点からの考察は不十分である。人間の条件を「人間をも含む諸存在が共存することを可能にするものとしての開かれた空間」、「地球的・自然的なものとしての外的世界との接触と相互浸透のなかで形成されていく空間」として捉え、それが何かを哲学的に明確化することがさらなる課題となっている。

そこで問われるのは、現代において、人間の存在条件が、人間的尺度を超えたところにあるものとしての地球的・環境的なものにより根本的に規定され影響されてしまう人新世的状況であると考えられるようになってきているが、この状況で、人間存在の条件を空間的なものとして考えるとしたら、いかなる哲学的な理解が得られるのか、という問題である。

2. 研究の目的

本研究は、エコロジカルな危機の状況(人新世)のなかで生きることになる人間存在の条件を「空間性のあるもの」として問い、哲学的に理論化することを目的としている。そのため当初の計画として、人間の条件を、1)「リズム、雰囲気、気配といった前-言語的で行為的な水準を土台とする空間として考えること」、2)「人間だけでなく、諸々の人間ならざる存在(non-human beings)が共存していくことの土台となる、不安定な空間として考えること」を課題とした。すなわち、この空間論的な観点の意義と可能性を、20世紀から現代における大陸哲学の著作群を「空間」「場所」「世界」をめぐるものとして解釈し現代的に展開させていくことをつうじて明らかにすることを目的とする、ということである。

さらに本研究は、哲学的な考察との関連で、人新世における人間存在の条件をめぐる実践的問題を探るため、建築をはじめとする空間形成の実践の成果の調査・インタビューを行い、哲学的な思考の形成のためのヒントを得ようとするを目的とする。そのことで、建築、都市デザインといった空間にかかわる実践を導く指針を提示しうるものとなることを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、下記の3つの研究課題を実施しようと試みた。

第1の課題として、主としてハンナ・アーレントをはじめとする20世紀半ば以降の哲学における人間の条件をめぐる考察を、人新世の観点から検討する。その際は、その考察を、現象学の研究を起点にしつつ、その主観主義的傾向を克服し、人間存在の条件を、「世界」や「地球」という、人間を支えるものでありながら人間にとって外的で他者的なものとの関連で考えたものと捉えることを起点とする。そのうえで、そこを「リズム、雰囲気、気配といった前-言語的で行為的な水準を土台とする空間」をめぐる考察として展開し直す。この観点からの読解は、ディペッシュ・チャクラバルティやティモシー・モートンによって進められているので、これらを参考にする。彼らは、人間存在の条件を、人間を超えたものとしての世界の一部と捉え、人間世界と人間ならざるものとの世界の溝を強調するが、これに対して本研究は、二つの世界の相互浸透性を強調する立場から考察をおこなう。これは、人新世において形成される人間の条件を、人間世界と人間ならざるものとの世界が交わるところに形成されるものとして考えることを意味している。

第2の課題として、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリの哲学の検討を、人新世の観点から行う。ドゥルーズとガタリの著書は、人間の行為と共存の条件を、自然的なものとの接点で不安定な状態で形成されると考えた著書であり、その点で、人新世的状況を先取りしていた。こ

の観点からの読解が、エリザベス・グロス、クレア・コールブルックらによって進められているので、彼女らの先行研究を参考にする。彼女たちは、人間に限定されない事物や生き物を相互連関的に共存させるエコシステムのアイデアの提示を試みたが、これに対して本研究では、エコシステムのなかで人間もまた形成されていくという考えから、エコシステムと人間との相互作用的側面をも明確にしていく。人間存在の条件を、地球的・自然的状況のなかで形成されるものとして考えることは、それを不確定で変化しうるもの、人間的尺度を離れたところにあるものとして考えることである。

第3の課題として、人新世における人間存在の条件をめぐる実践的問題を探るため、建築のおよびアートの実践者との対話の場を設け、哲学的な思考の形成のためのヒントを得ようとする。それだけでなく、可能なかぎりアーティストとの共同作業に関わることで、哲学的な文章をそれらの実践との接点で書くことを試みる。

4. 研究成果

(1) 本研究においては、人新世に関する哲学的な考察をめぐる、英語圏での研究状況との接点で、その状況の理論的整理と解釈、および翻訳を通じた紹介を行うことを試みるなか、いくつかの学術的成果を得ることができた。初年度には、その成果として著作(単著『「人間以後」の哲学』)を刊行し、論文(英語の査読付きジャーナルCRに掲載)を刊行した。これらの著作と論文では、人間存在の条件を、人間を超えたものとしての世界の一部と捉え、人間世界と人間ならざるものの世界の溝を強調するという立場に対し、二つの世界の相互浸透性を強調する立場から議論を進めたのであるが、次第に、人間世界の限界において人間を超えた世界に触れるなか、前言語的な領域としての雰囲気、リズムの存在をいかにして言語的に表現するか、そのために要請される、哲学的文章のスタイルへの問いをめぐる議論に展開していった。また、この過程で、英語圏の研究状況へと貢献するには、近代日本での、環境や場所といった概念を元にした哲学的思考の成果の再考が求められ、その観点から、英語で報告・出版することが可能であるということがわかってきた。2022年度と2023年度には、英語圏での代表的な研究者であるティモシー・モートンとディペッシュ・チャクラバルティの著書の日本語訳を刊行した。以上の過程で、本研究は、人新世という自然科学の側で提起された状況認識を踏まえつつ、それを人間生活の条件に関わる問題として哲学的に定式化し直し、哲学的思考の拡張の可能性をめぐる議論の状況を整理することに貢献した。

(2) 本研究を通じて確証された最大の論点は、人新世的状況における人間の条件を哲学的な言語で表現するという課題への取り組みに際しては、芸術実践との接点で、そこでの対話的關係が求められるということである。とりわけ、人間ならざるものの諸存在との相互連関的な場として、さらには人間的尺度を超えた外的世界との接点で形成されるものとしてそれを表現するということの可能性の条件を考え、のみならず言語化するには、哲学的な著作の読解・解釈を踏まえつつも、それを展開するための起点となる感覚的・抽象的な体験が必要で、そこでアーティストとの対話と、その作品から示唆を得ていくことの大切さを理解したことは、本研究の重要な成果と言える。実際、何人かのアーティストのもとを訪問し、作品鑑賞だけでなく、その作品の制作に関わる思想について話してもらおうということを経験も行うなか、そのことへの理解を深めた。とりわけ写真家・川内倫子とのやりとりを通じてわかってきたのは、次のことである。写真は、日常的な時空間とは別の次元において感知されうるものを表現する媒体といえるが、この媒体に触発されるかたちで哲学的な思考が可能になるとしたら、そこで書かれる哲学的な文章は、写真と同じく、現実を映し、のみならず人間の現実における内的経験に関する思考をも映すものとして提出されることになることを明らかにし、のみならず、その観点から、文章を書き、成果にすることができた。この成果は、川内倫子の写真集に収録された二つの改題エッセーとして刊行された。のみならず、2024年度末には、川内の写真と本研究代表者のテキストとの往復的なやりとりで構成される著書が写真・美術専門の出版社であるトーチプレスより刊行される予定である。

(3) 本研究では、コロナ禍が落ち着いてきた後半において、国外とりわけヨーロッパでの交流と発表を試みた。ドイツのチュービンゲン大学の間文化研究センターで2023年11月に行ったレクチャー(An Undecided Dimension of Depth: On the Question of the Place in the Thought of Kitaro Nishida)では、西田幾多郎が晩年の論考「場所的論理と宗教的世界観」で試みた「奥底の領域」をめぐる考察の現代的意義を論じたのだが、その副産物として、近代日本で展開されつつも日本語でしか書かれなかったために欧米をはじめとする日本国外のコンテクストへと開かれることのなかった西田の思考を、いわゆる「日本哲学」のコンテクストとは違う、人新世的状況における新しい哲学的考察のコンテクストにおいて、欧米との接点で解釈し直すことの可能性を示すことができた。それにより、人新世における人間の条件に関する哲学的思考の文章による表現において、近代日本の哲学的思考を欧米の哲学との接点で展開することが求められること、その立場から貢献することが可能であるという観点を見出すことができた。この観点から

の研究をすすめ、一部を論文にして投稿することができた（2024年5月の段階では、査読結果待ちの状態にある）。

（4）総じて言えば、本研究「人新世の空間哲学：リズム・気配・人間ならざるものとの共存の空間をめぐって」は、人新世的な状況に生きているという想定のもと、20世紀半ば以降の哲学的な問いの一つと言える「人間の条件」をめぐる問題に関して、哲学的な文章を書くことをつうじて何かを明らかにすること、そのための手がかりを、アーティストたちとの対話的關係のなかで、リズムや気配、人間ならざるものといった、従来の近代的な哲学のもとでは考慮に入れられることのなかった領域に求めていくこと、それを通じて、哲学的な文章を書き、著作や論文にしていくことに努めた。研究を進める中、英語で書き、発表することを試みたのだが、その過程で、ティモシー・モートンやディパッシュ・チャクラバルティに代表される研究者たちが行なっている成果を参照するだけでなく、それらをも含めた知のグローバルなコンテキストの中で、自分の哲学的思考を規定する条件としての近代日本の哲学思想の意義と可能性に思い至った。だが、この意義と可能性を、欧米の哲学思想との関係のなかで、それも人新世的状況のなかで、いかにして哲学的・理論的に明確化するかについては、研究開始当初の見通しを超えるもので、今後の課題として残された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Masatake Shinohara	4. 巻 1
2. 論文標題 Revision of the human condition in the age of Anthropocene	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Body , Nature, and Culture	6. 最初と最後の頁 11-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.23124/JBNC.2022.1.1.11	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 篠原雅武	4. 巻 48
2. 論文標題 人間世界と事物の世界の「あいだ」：人新世における新しい共存様式について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 124-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Masatake Shinohara	4. 巻 20
2. 論文標題 Rethinking the Human Condition in the Ecological Collapse	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CR: The New Centennial Review	6. 最初と最後の頁 177-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 篠原雅武	4. 巻 72
2. 論文標題 ハイパーオブジェクト、外縁、境界と辺境	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 82-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠原雅武	4. 巻 76
2. 論文標題 エコロジカルクライシスにおける「共鳴領域」の探求	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 196-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Masatake Shinohara
2. 発表標題 Planet and Place in the Anthropocene
3. 学会等名 The Fifth Biennial Conference of East Asian Environmental History (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 篠原雅武
2. 発表標題 継続中の問題としての「人新世」をめぐって
3. 学会等名 韓国教育思想学会夏学術大会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 篠原雅武
2. 発表標題 惑星と場所：人新世的状況における居住可能性をめぐって
3. 学会等名 韓国教育思想学会夏学術大会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 篠原雅武
2. 発表標題 惑星と場所：人新世の状況における居住可能性(habitability)をめぐって
3. 学会等名 日本建築学会大会地球環境部門研究協議会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masatake Shinohara
2. 発表標題 An Undecided Dimension of Depth: On the Question of the Place in the Thought of Kitaro Nishida
3. 学会等名 GIP LECTURES 2023（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 篠原雅武
2. 発表標題 奥底の領域へ：秘密のドアとしてのモーションを通して
3. 学会等名 公開レクチャー「新たなエコロジーと芸術上の実践」（金沢21世紀美術館）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 篠原雅武
2. 発表標題 奥底の間際において住み着くということ
3. 学会等名 公開レクチャー「人新世の哲学について」（森美術館）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 篠原雅武
2. 発表標題 「惑星の時代」における人間の条件
3. 学会等名 日本建築学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masatake Shinohara
2. 発表標題 Revision of the Human Condition in the age of Anthropocene
3. 学会等名 Body As Nature And Culture, And The Anthropocene（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masatake Shinohara
2. 発表標題 On the new conception of place: A comparative consideration of the contemporary eco-philosophy of Timothy Morton and the Japanese traditional philosophical thinking of Kitaro Nishida
3. 学会等名 2020 Institute of Body and culture International Conference（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 篠原雅武
2. 発表標題 人新世の時代における世界像の更新にかんする哲学的考察
3. 学会等名 地球惑星科学連合大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 篠原雅武
2. 発表標題 人新世 / 新型コロナ禍での人間の条件への哲学的考察
3. 学会等名 日本建築学会 地球環境委員会 公開委員会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 ディベシュ・チャクラバルティ (訳者: 篠原雅武)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 236
3. 書名 一つの惑星、多数の世界	

1. 著者名 長谷川祐子、篠原雅武、石倉敏明、ブリュノ・ラトゥール、エマヌエーレ・コッチャ、その他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 以文社	5. 総ページ数 336
3. 書名 新しいエコロジーとアート 「まごつき期」としての人新世	

1. 著者名 ティモシー・モートン著、篠原雅武翻訳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 319
3. 書名 ヒューマン・カインド	

1. 著者名 川内倫子、篠原雅武、荒井保洋、その他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 朝日新聞出版社	5. 総ページ数 223
3. 書名 M/E : 球体の上、無限の連なり	

1. 著者名 Ann Cotten, Masatake Shinohara, Elke Atzler, Manfred Muller, and others	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Hollitzer	5. 総ページ数 223
3. 書名 Wot Da Future: Literarische Dialogge	

1. 著者名 石井 美保、岩城 卓二、田中 祐理子、藤原 辰史、松嶋 健、立木康介、篠原雅武、ホルカ・イリナ、大浦康介、森本淳生、山崎明日香、松村圭一郎、能作文徳、岡安裕介、唐澤太輔、田中雅一、橋本道範、武井弘一、井黒忍、池田さなえ、瀬戸口明久、近藤秀樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 478
3. 書名 環世界の人文学	

1. 著者名 川内倫子、篠原雅武、デイヴィッド・チャンドラー、レスリー・マーティン	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Torch Press	5. 総ページ数 384
3. 書名 Illuminance	

1. 著者名 篠原雅武	4. 発行年 2020年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 288
3. 書名 「人間以後」の哲学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------